青年海外協力隊マレーシア会　19号

移住して発見した新たな夢

松倉はるか（平成 19 年度 2 次隊　環境教育）

2019 年 5 月、令和になってすぐに神奈川県逗子市から高知県の日高村に家族３人で移住した。きっかけは夫の転職したいなという発言と私の出産だ。どうせなら遠くに行っちゃう？の提案に乗ってきた夫と話を具体化させ、移住先はインスピレーションと憧れから、南国土佐の高知県一択で検討。一度も行ったことがなかったけれど。

日高村は最近「仁淀ブルー」という名で話題になり始めている仁淀川エリアに位置する。最後の清流と謳われている四万十川の方が知名度はまだまだ高いが、国交省が発表している水質が最も良好な河川に何年も選ばれ、奇跡の清流と呼ばれている仁淀川が売りの一つである。高知市内からは車で約３０分、松山街道の国道沿いに繁栄している人口５０００人に満たない小さな村だ。ただ、人里離れた場所にある村というわけではなく、町と町に挟まれた村で JR の駅も３つあり、国道が走り、コンビニも村内に３つもある比較的便のよい村である。住むにはちょうどいい村だった。ただ観光という視点で見ると、あまり特徴がなく、国道を走っているといつの間にか終わってしまっている村で、人がお金を落とす場所がないと言われていたそうだ。数年前に道の駅ができ、特産物のフルーツトマトを使った村おこしが成功し、県内では認知度はあがった。ただ、それ以外の観光がまだ手薄ということで、観光のさらなる発展のために協力隊(注)を募集していた。私は観光協会付けとなり、特に今までの経験からインバウンドへのリーチが期待された。活動を始めてみて感じたのが、宿泊施設がないことで観光客は高知市内で観光・宿泊し、松山のほうに抜けていってしまうため、オムライスを食べてもらうくらいの足止めはできても、それ以上の広がりが難しいことが見えてきた。活動当初は、地元の人たちに農家民泊を提案し、広げていけないかを検討した。実際に農家民泊や民宿へリサーチに行ったとき、「他人をその気にさせるのはとてつもなく大変。だったら、自分でやったほうが早いよ」と言われたことに妙に納得した。民宿もビジネスであり、言われたからやってあげた、協力してあげたのにという他人任せだと衰退しかない。

仁淀川の安居渓谷：仁淀ブルーの名の由来場所

移住当初は起業など全く検討もしていなかったが、活動開始から約２カ月後には自分で宿をやっていきたいと思うようになっていた。それは地域を活性化させるという観点から生まれたものだが、自分のライフスタイルに合い、今までの経験が活かせ、且つ宿ビジネスの今後の可能性を感じたからだ。借家⇔保育園⇔職場が車で１０分圏内であることは逗子時代からは考えられないほど便利で、コンパクトな生活にとても満足していたが、頼れるのは自分と夫だけという環境で、観光協会の勤務は週５の８時半から５時のフルタイム。まだ小さかった娘は保育園の洗礼を受け、熱を出したり体調を崩したりで度々呼び出しを受け、休みを調整する日々。休みは取りやすかったが、有給にも限りがあるため、土日出勤などで調整させてもらうと休める日がないなど、やはり雇われの身の不便さも感じた。また子供が小学校に上がった時などを考えると時間の融通の利く自営業に魅力を感じた。

宿経営に興味を持ったとき、それまでのリサーチから持続可能な宿にしていくため、食事提供はしない、１棟貸切の宿にする、長期滞在がし易い宿にする、価格を下げ過ぎない、と決め、主なターゲットは欧米系の外国人旅行者、次いで都市部のファミリー層とした。インバウンドでは特に、欧米系の人たちは長期休暇を取り、一つの場所に長期滞在する傾向があるため、その人たちに選んでもらえる宿にしようと思った。コロナにより、もうインバウンドは戻ってこないだろうというネガティブな意見も聞くが私は必ず戻ってくると踏んでいる。またアフターコロナでは人々のニーズは変化し、１組限定や長期滞在がしやすいなどはむしろ好まれる形態の宿になるはずだ。現在、産休・育休中でオープン自体が１年後ろ倒しになったことで、タイミングもより良くなった。国内向けには都市部のファミリー層をターゲットにしている。それは、自分たちが高知へ来た際に小さな子供を連れて泊まれる宿がほぼなく、宿探しに苦戦した経験からでもある。シティホテルやバックパッカーなどの安宿はあるものの、周りの客を気にすることなく、プライベート空間を満喫でき、小さな子供が安心して泊まれる宿が欲しいと思ったからだ。

そう思って以来、村内での物件探しが始まった。地方移住の一つの目標でもあった田舎の古民家をリノベーションして、理想のマイホームに住む！という夢も叶えるべく、母屋と離れのように２棟建っている中古物件を探したが、これが大苦戦。そもそも村内に売り物件が少なく、条件が揃うものが出てこない。人伝てに空き家を聞いては持ち主に売る気はあるかを確認したり。そもそも持ち主にたどり着けなかったりとかなり難航した。もう村内では難しいかと諦めかけた時、今年の５月に古民家というほど古い家ではないが、２棟が売りに出され、立地も納得の場所で見つかった。現在は自宅にする予定の母屋のリフォームを進めており、来年春にゲストハウスのリフォームに取り掛かる予定。出産前に売買契約、リフォームの設計事務所との契約・リフォーム案の摺り合わせ、補助金申請、ビジネスローンの面接等、我ながらよくやったなというほど詰め込んだ。すべてが予定通りに終わった時、予定日より１日遅れて長男が生まれた。なんて空気の読める子だろう！

高知での子育て満喫中

来年の初夏に協力隊復帰後、１棟貸切ゲストハウスの運営の準備を進めていく予定だ。この宿を拠点に仁淀川エリアを満喫していって欲しい。そのためにも宿と体験プログラムの融合も図っていこうと考えている。具体的には宿で流域の体験観光の予約・支払いができるようにすること。まだクレジットカードなどのキャッシュレスに対応できている体験事業者は少ないが、利用者としてはクレジットカードの利用が欠かせない。特にインバウンドを取り込むには必須条件である。外国人が体験できるプログラムの開発も必要である。

今までの協力隊の活動として特に力を入れていたのが、都市部の人や外国人旅行者をターゲットにした修行プログラムの開発だ。ニッチなプログラムだが、だからこそターゲットに届けば需要はあるはずだ。モニターツアーでブラッシュアップを図りながら、協力隊復帰後にプロモーションを再開し、宿運営と共に売りこんでいきたい。来年で４０歳。新たな出発である。宿開業は不安もあるが、ワクワクのほうが大きい。この地に来なかったら考えもしなかった未来が今ある。もちろん、私のやりたいことに賛成・応援し、自分はサラリーマンとして固定給を家庭に入れ、支えてくれている夫がいるからこそできる冒険であり、大感謝だ。

（注）地域おこし協力隊は、総務省所管で過疎地域等の条件不利地域に移住して、地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組です。隊員は各自治体の委嘱を受け、任期は概ね 1 年以上、3 年未満です。

マレイシアの名残り

小田島　成良（昭和 61 年度 2 次隊　稲作）

みなさん、日本各地で世界の何処かで、どうしてますか。ボクは、ワールドカップに立ち会うのを機会に、あたふたと東ティモールから戻って二年になります。

帰国後は、放ったらかして出かけた岩手 OV 会の事務局を担ってます。若手の OV は忙しいから、できることくらいはやりますよ～、って訳で。以降、covit に対する世間の過剰反応に辟易しつつ、さぁて OV 会で何をどうしたもんか。で、思い出した。10 年前、震災直後もそうやってみんなの知恵で被災地活動を始めたことを。元々、OV 会の活動は受身でした。つまり、協力隊事務局等の広報を手伝うのが中心。でも、震災が転機になった。自分たちでできることを何とかしなきゃ。で、兎に角始めた。被災者の健全な食生活を願って、仮設住宅に野菜を届けるというもの。OV 会として相応しい活動なのか、分からないままに。気が付くと、仮設住宅に被災者が居なくなる 2018 年まで、90 か月 151 回往来してました。この間に様々な発見も。震災直後は誰彼問わず、多くの人が被災地でできることを探してた。他県の OV 会から、海外の OV からも実際に支援が届きました。マレイシア OV が集った折には、翌朝の戻り足を遅らせて活動を手伝ってくれたり。元々は任国への郷愁を共有する人たちの集まり。それだけに物足りなさを感じていた OV には良い機会だったかな。改めて OV 会の規約を見直したら、これは目的から逸れかけた活動なんですよ。OV 会の目的は、極言すると協力隊広報を下請けすること。ナニコレ？もちろん、広報は手伝うけどさ。OV は、二年の協力隊を懐かしみ広報するだけなの？帰国後に何十年という在所での暮らし、人生があるのに。そこで、今年から外国人支援を始めました。技能実習生、留学生等の外国人に、具体的に何をどうするか探りながら、とにかく始めよう！って感じで。外国人の存在が当たり前なのに、社会も行政も依然としてぎこちない。OV こそが担うべき立場、OV 会こそがこの現実に働き掛けられる、という直感が多くの OV にあったのでしょう。とはいえ、その為には OV 会の経済的な自立が前提。こちらの方が活動の本体より難しいくらい。

仮設住宅で続けた野菜販売

誰の中でも、あのマレイシアはかけがえないですよね。生涯最良の日々、マレイシアは郷愁の中に留まってますか？　ある日「え～！　遊んでくれたオダシマ、あなたなの～？　行く行く～」ってメッセージが届く。3 歳のよちよち歩きだった子が、家族連れてエアアシアで遊びに来る。そういうことが当たり前になってる。嬉しいような可笑しいような照れたような、マレイシアの記憶が甦る。今こんな田舎で、OV たちが外国人と社会の仲介に動きだすのも、時間をおいてマレイシアの次世代と新たな関わりが生まれるのも、謂わばあのマレイシアの名残り。

マレイシアからやってきた軽やかな次の世代

JICA ボランティア派遣現況

コロナ感染拡大で一斉退避していた JICA ボランティア（シニア・日系含む）は、徐々に派遣が再開されています。2021 年 9 月 21 日現在、31 カ国に 234 名が派遣中です。東南アジアでは、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナムの国々に派遣されています。残念ながらマレーシアには派遣再開できておりません。

児童養護施設で働く

竹前雅子（昭和 62 年度 1 次隊　図書館司書）

1990 年にマレイシアから帰国した後は、主に JICA 関連の業務に携わってきました。直近の 10 年間は企画調査員（ボランティア事業）として、大洋州と中南米に派遣され、ボランティア事業全般と事務所運営に携わりました。ボランティアのなかには異文化適応や活動で悩む姿があり、その支援にカウンセリングやコーチングの必要性を感じ、通信制の福祉大学で心理学を学んだことが、現在の仕事につながっています。また、これまで海外にばかり目を向けてきましたが、日本の自殺者が 1998 年から 14 年連続で年間 3 万人を超えるという事実に愕然として、このことも心理学を学ぶ動機になりました。心理学は「優しい気持ちがあれば学べるもの」と安易に考えていましたが、それは大きな誤解で、目に見えない「心」を研究対象とし、実験と統計により仮説の有意性を検証する「科学」という特性があります。イメージと異なる心理学に戸惑っている時に出会ったのがソーシャルワークで、平和を擁護し、社会正義や人権を追求し、すべての人々が満ち足りた生活を送ること（ウエルビーイング）を目指すことから、協力隊の精神にも通じ、自分自身にしっくりときました。

施設全景

現在、長野県軽井沢町にある「軽井沢学園」という児童養護施設で児童指導員として勤務しています。児童養護施設は環境上養護を必要とする児童（1 歳以上 18 歳未満）が措置され、保護者等に代わり養育を担う福祉施設です。措置児童の多くは虐待や不適切な養育を受けた子どもたちで、児童虐待は統計を取り始めてから増加の一途をたどり、2020 年は過去最多の 20 万件を超えています。必要な時に適切な養育を受けられなかったことから、大人との信頼関係を構築するためのお試し行動や注目獲得行動など、発達上の課題を抱える子どもが少なくありません。愛着障害、発達障害、知的障害、精神障害など、様々な障害を抱える子どもたちもいます。施設生活という制約はありますが、可能な限り家庭的な経験を積んで、生活知識を高めてほしいと考えています。

私は子育て経験がなく、小学校高学年になると宿題を指導するのも一苦労になります。役に立つことがあるのか手探りの状態ですが、傾聴に徹し、受容と共感、個別化、非審判的態度、自己決定といったカウンセリングマインドを持って、子どもたちと接するように心掛けています。勤務二年目になり、海外に住んでいた植物好きの軽トラに乗っている変なおばさんというイメージが定着し、徐々に子どもたちとも関われるようになってきました。自分に自信をもって、軽井沢の自然のなかでのびのびと素直に育ってほしいと考えています。

軽井沢学園の子どもたちが凄いと感じるのは、どんなに激しいケンカや言い争いをしても、決して容貌や能力（障害）のことを非難の材料にしないことです。自分が子どもだったら、格好の材料として酷い言葉を浴びせてしまうと思います。先日その理由を先輩職員に教えて頂く機会がありました。以前、知的障害の子ども（A 君）がいました。ある日、職員にこっぴどく怒られ廊下で泣いている男児（B 君）を皆な遠巻きに眺めているなか、A 君だけが泣いている B 君に優しく声をかけてくれたそうです。その一件もあり、障害を理由に B 君をいじめることはなくなり、その伝統が今日まで続いているそうです。他者に寄り添う気持ちを大切にしたいと感じました。

ニジマス釣り

児童養護施設の子どもたちは、高校等を卒業すると生活のすべてを自分自身で責任を負う社会的自立を果たさなければなりません。進学する際に、奨学金を申請する場合もありますが、それでも自己資金が必要なため、高校生になるとほとんどの子がアルバイトを始めます。経済的な理由で進学をあきらめる子どもが多いのも現実です。保護者の支援は望むことができず、社会にでればステレオタイプの偏見と闘っていく彼ら、強い心を持って自分の人生を切り拓いてほしいというのが、学園の全職員の願いです。

軽井沢学園では「軽井沢学園を応援する会」というサポーター制度を運営しています。学園ホームページから詳細をご覧いただけますので、学園の事業や日常活動もあわせて、一度、ご覧いただけると幸いです。

www.karuizawa-gakuen.jp

JOCA オンライン会議報告

11 月 27 日(土)、JOCA 主催による国別・職種別 OBOG 会の初めての合同会議がオンラインで開催されました。当日欠席の団体もありましたが、13 団体の参加がありました。当会からは白山会長と事務局志岐が参加いたしました。

国別・職種別の会合としては初めてであったため、参加団体が各自、団体紹介をし活動状況を報告しました。コロナの中でなかなか思うような活動ができないというのは、どこも一緒です。ただみなさん Web 上での報告会や技術指導を実施したり工夫されているようでした。また、①代表評議員の選出方法、②共同事業費のあり方、③今後の会議のあり方の３つの議題について話し合われました。

なお、OBOG 会の JICA 担当窓口は人材育成課であること、JOCA からは、議題の③について、今後も国別・職種別の OBOG 会とも連携を密にしていきたい旨の話があり、今後も定期的に会合を持ち、相互の理解を深めていくこととなりました。

出版のご紹介

『ラザック先生　マレーシアと日本の架け橋』

（公社）日本マレーシア協会　発行

広島への原爆投下で生き残った唯一のマレーシア人でマハティール首相によって東方政策会長にも任じられたラザック氏の人生がわかる書

『人類は 21 世紀、地球上に生存できるのか―仏教環境学の視点からー』

白山肇著　地域貢献会社にこ　発行

二酸化炭素排出、温暖化、SDG s 等々の問題を仏教環境学からひも解く、目からうろこな内容です。

金子正美 OB、おめでとうございます！

当会北海道ブロック役員でもある金子正美 OB（H.1.1 村落開発普及員）が JICA 理事長表彰を受賞されました。帰国後、JICA 研修、技術協力プロジェクトに携わり、北海道庁退職後は大学で教えるかたわら、国際協力人材育成に努めるなど、幅広く活躍されてこられました。

編集後記

コロナの感染拡大がなかなか落ち着かず、活動も会員の皆様との集会も思うに任せない日々が続いています。せめて会報だけはお届けしたいと、今号は国内で活動している方々を中心に原稿をお願いしました。皆さんの原稿を読ませていただき、しっかりしなくてはと刺激をもらっています。

協力隊まつり 2021

当会は参加しませんでしたが、今年は 4 月 24 日、25 日にオンラインで開催されました。対面はできないものの、遠くの OB 会の方が参加できるメリットもあり、WEB 上とは言え、懐かしい顔にも会えました。オンライン協力隊まつり公式ホーム頁は下記とおりです。

https://www.jocv-fes.net

原稿募集　マレーシア会会報への原稿は随時受け付けています。OB・OG に向けて発信したいこと、活動紹介、職場紹介などお寄せください。

寄付のお願い

活動費として、寄付は随時受け付けております。よろしくお願いいたします。

振り込み先：

郵便局記号：10140　番号 51611341

（郵便局外から振り込みの場合：店番 018、

普通口座　5161134　です）

口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会

代表　白山　肇

事務局からお願い：住所、メールアドレスを変更された時は下記連絡先までお知らせください。

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と 2010 年の青年海外協力隊 OB/OG 会出席者に E メールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在 620 余名となりました。まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行　青年海外協力隊マレーシア会

会長 白山　肇

162-8433

東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5

JICA 地球ひろば　メールボックス 51

TEL：　090-7186-1065（国際協力サロン）

MAIL：malaysia@ics-together.com

https://ics-together.com/office_jocvmalaysia.html

（　2021.12.25　発行　）